椿説弓張月　前編巻之五

鎮西八郎
爲朝外傳　椿説弓張月前篇　巻之五

東都　曲亭主人編次

第十二回

琴弾神社に武藤太義に逢
觀音寺村に白縫女仇を殺

爲朝は使廳へ召されて。謀反の女を問れども。何のをうやうもなく。首を刎られたりのち回答なし。なほ潔く死刑に處せらるべき欲。又配流せらるべきなれとも。支度ばかりにみ少納言入道信西班を出されたり。此度の合戰に。御方の兵士多く命を隕せしは爲朝一個の所爲ぞ。八虎の凶徒なり。加之内裏高松殿に火を放ち。御所に矢を進らせんなど罵るよし。これ君を射奉りしに等しくその罪重し。偏に贔屓の制度に及ぼ光罪

椿山文庫園大学図書館蔵

不行ひ人の勿論なりとて、嶋へとぞ遷されぬ。関白殿（法性寺忠通公）宣ふ。爲朝重科逃れがたけれども、その場を逐電して、今やで身命を有て、実にこれ天命なるべし。されば死罪に及ばるべき歟。又彼の弓箭は長さ七尺。上古も例なく、末世も有がたかんめる勇士を忽地死刑に行ひ、あべ後代の謗を慮らん。似て倘き先非を悔て、野辺の秋轉て、あべ朝家の御宝なるべし。理を盡して宜しく諸司百官これに従ひ、あられぬ事を仰て遠流に處して伊豆の大嶋へ流し、つゝまべきを定る。信西は衆議の一決せを伺て、遺憾そあれども、すべ関白の仰に悖らんやもなく、只此うへは義朝に仰て彼の肘の筋を断せ、ぬべし。弓を引きぬに致べし。やがて如此ひしかるべしやあらんと、その頃関白忠通公より、爲朝既に肘の筋を断せといへども、忍に致べし。倘路次に于て不慮の過あらんもはかられば、伊豆大介狩野工藤茂光を召のぼり、彼がゝの者を以て、厳しく守護せ、せ給へ。いと信ぶもゝ、ゆゑあれば、関白殿諾ひ給ひ、やがて茂光を召ふとの時、武藤太に恩賞を乞んあるに、荒川へもくだる。佐渡左衛門尉重貞ぶ、まつ洛へのぼり、旅宿に、あり、くりつゝその便宜を窺ひつ。爲朝既に遠流に處せらるゝ。有一日重貞が許に、いとゝ、養父藤市に、つゝ輙く爲朝を生拘せ進ぜ、せられば、その功莫大なり。あられ過分の恩賞に預ぶやとこひねがへ。重貞、この武藤太を忠孝なりとおのれが栄利をとりて、養父の舊主を告訴せ、こそ世にも稀なる愚者なれ。憎さもあ、くまでとゝ。今これを賞ぜられまじ。

謀反の徒あんとさ告訴するのなるんとゝ思ひえ。もるゝ百貫
今の百金餘の賞銭をとらせり。武藤太これを足〳〵彼鎮西八郎八萬夫不
當の勇士あゝ名〳〵る軍将〳〵ちも言〳〵〳〵るを故るゝ搦〳〵を進
らせ〳〵〳〵武士ゝもゝれ一處懸命の地をも完行〳〵べきゝ思ひの
外ことゝあまりふ當ゝされとゝ〳〵るゝ。つぶけるを重負ゝ〳〵。憎
き奴るゝ〳〵れゝ〳〵の足らゝ一銭もゝまゝゝ氣えあ〳〵
ゝえ〳〵武藤太怕ゝ〳〵ふ〳〵いいゝゝ。彼銭をゝ〳〵〳〵迯るゝゝ〳〵
其処を退ゝ。銭をゝ金ふうえ〳〵懐ふ〳〵。遂ふ近江へ立ゝ〳〵。荒川の
郷ふ到ゝゝ忽地郷の壯佼二三十人彼此より走り来ゝ〳〵棒を
拿〳〵遽〳〵。この愚者ゝの面目ありゝゝゝ〳〵ゝ〳〵ゝ汝ゝ紫の出
曹司ゝゝんを告訴致せ〳〵。その夜のゝちゝゝえ〳〵。藤市ハ只泣

ゝ泣あ〳〵。身ゝのびゝ〳〵ゝやありゝゝん次の日梁ゝ索を締下。忽地縊ゝて
死ゝるゝ。その折〳〵もゝ〳〵情由をゝゝるゝゝの〳〵語ゝをゝ〳〵ふ彼ゝ曹司ハ
藤市ゝ舊の主君ゝ〳〵ありゝるゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝ
べきを情ゝゝも告訴〳〵〳〵搦捕らせ。剰その故ゝゝ〳〵。養父を非命ゝ死せ
ゝ。五逆〳〵やいん。十悪〳〵やせん。あ〳〵憎や。彼撃ゝ括れゝゝ。いゝゝゝあ〳〵
く罵り〳〵打倒さんと競ひ〳〵ゝ武藤太ゝ〳〵ゝ一言のゝ〳〵ゝも及ばゝ
満面赤くゝゝり青くゝゝり〳〵。鼠のゝ〳〵ゝ迯るゝ〳〵〳〵迯ゝ〳〵。ゝゝび洛へ上ゝ
〳〵〳〵。人ゝる彼ゝ不義不孝を憎ゝ〳〵〳〵。宿を貸りのゝ〳〵。路ふ
ひあゝりのゝ面あゝり罵ゝ〳〵ゝ或ハ礫を打ゝ〳〵ゝ切〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵。
洛ゝも足をゝゝ〳〵〳〵。直ゝ浪速を投ゝ下りゝる。此ゝゝゝゝも武藤太ゝ衢
ゝ權〳〵ゝ〳〵び〳〵地ゝ〳〵。ゝゝる人ゝもゝゝほられゝ。洛ゝゝ死をゝ〳〵。ゝゝゝの

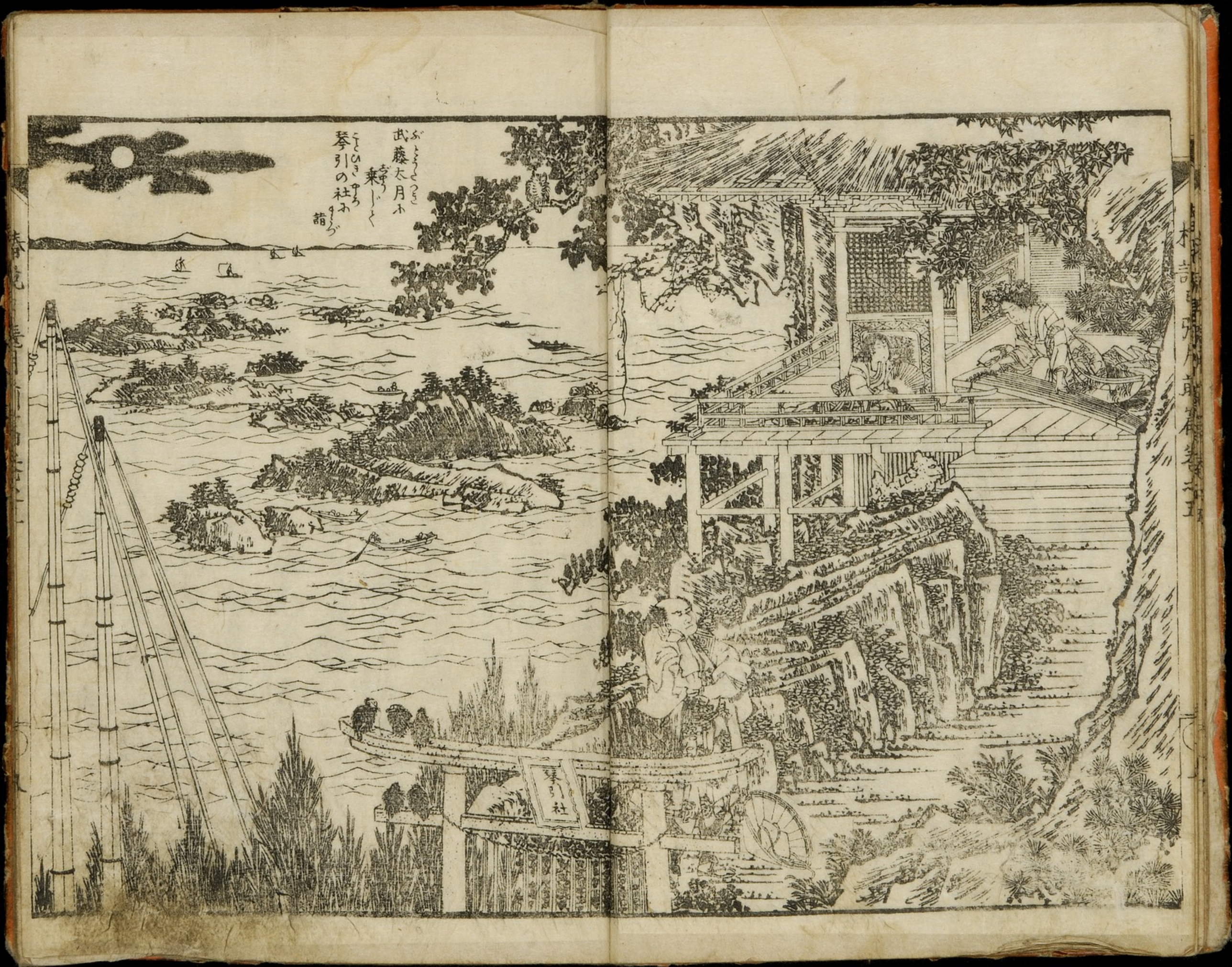
あらくこと
荒川の御人
いろ
怒く武蔵と
打んとも

情由を仔細ことを憎むの洛あるも過ぎぬべし。とうとう西國へ赴こと。世代安くてこそと尋思し。路次あるべく禍あんこを害怕やうく船に乗り、
んといふ。人を乗合を許さ祈べせんをべる。陸をひくんとする折しも途ふ
丈五丈六といふ同胞の舟人は行あひぬ。この丈五丈六は武藤太が浪速よ行り
しとに隔あを友ありしぶ。まづ船路を拒ぐ。金二三両をあくく船賃
よりてくんるをこのこるる。志るふ件の兄弟は元筑紫人ありしが故郷おて
人を殺し。浪速へ逃来りく海船の傭乗るとつ。世をとる全頼け悪
徒あるこは一議あも及ぶ。容易くうけ引く。俄頃ふ一艘の船を借出いと
叮嚀ふ管待ふる。武藤太ふくよ孫とひく西國ふく奇しうべき物
を駄買とこのくく松ふ積せその夜の中ふ松出しく西を投く走るる
ふ丈五丈六はいづれの湊へよせんと問武藤太答く筑紫はその藜花

洛ふも劣らじと。やり。これ彼地へ赴こと。活計をみとべく多くは其処へと
く遣りまくといふ丈五又いふ筑紫はるる故郷ふ帰るるのあり
ひさかくく。長門の赤間関は富人も多くく世をとる便よこと湊し。
赤間へ赴こく。商賈をみ多くなど相語つ。追風ふ真帆を揚く走る
せしぶ。忽地風吹うくく。逆波天ふ衝渡海うるへくもあくざれへらば
く讃岐ある。水崎の室ふ歇船くく日和をを待合せるる武藤太は
ど四國ふ遊びくるもあくざれば。このこう一見せでやうて。知こりふ
よりあり。終日彼此を徘徊くく。中暮ふんこるこふ。舊の湊ふ立へ
ふ觀音寺村といふところよりは二三町こるふ琴引の八幡宮くせ
ふくり。この処の眺望蒼海は天と一色ふくく。吉備の國く鹽飽横木の
嶋く。只是眼下ふ涌出るるく。右ふ有明の濱あり。左ふ川湊あり。詩

ふ耽て謂を嗜むもあらねど。徒ふるゑんハ朽を。道の次ふ詣でゃ
と思ひて。彼神社へ赴きぬ。この時日も既ふくれぬるど。頃しも八月望
の夜ふて神社を南ふ向て。月も出るバいと明らゝぐきふ。昼より天結陰さ
まべ。させる眺望もなく。詣る人もあらざるに。武藤太ハ独り廣前ふ額
つきて。口説ゆう。抑神ハ凡夫の邪正を監て賞罰過ることなく。應驗
彊なりとやいふなれども。国の爲ふ朝敵爲朝を告訴て。佐渡左衛
門尉重負ふ搦捕せられ。その忠揭焉。その功灼然なりとふ重負
ふ。ざる鄙吝ふして。恩賞その功ふ當らず人の労を盗ミ。おのれが得
ることを世の人とれを曉得ぞ。却て武藤太を憎むの讐敵のごとく。
位をれ近江ふ。京浪速ふ身を投て。船
ふ宿ふ。西国を投て。船
出せ。又風難ふあらざるかを。
あらで。禍を轉て福をふへ富貴ることろ
ろ仕せまくと自の奸邪ぞ
ゆうけぞ人をうゝ世をたゝるを
雲おさまりて。玉兎高く昇。金波潮ふ映て。さるぶふ白昼のごく
なりふ高欄のもとふ當て。怨然と琴の音ゆえく
山越乃風乎時自見寐夜不落家在妹乎懸而
小竹槽
と万葉集第一ふ載る。雄略天皇讃岐国ふ幸せ。軍王が作
る歌をうゝ。声いとおりうゝ。ふ調又妙なるに磯の松
風もこれが爲ふけおれ。浦のあるも恥て音をやゝ。歌のこゝ
ろ。ねど。武藤太ハ。ゝ治つる人をゝ。ふ。ゝ神ゝ人と
疑ひ。欄のもとふ立出ゝ。れハ年紀二八ばかりなる美女の都

ゐも鄙ゐもあらぬ打扮〳〵。縹緋ゐ紅の襲せ〜袷そ。虚焼の熏さへゐるゐ〜そ。月の眉の艶ゐる。柳の腰のるよやうゐる。譬ハ櫻の枝ゐ海棠を咲せ〜。芙蓉の色香をこやゐるゐ異ゐ〜ぞほとりゐハ去ゐ〜さ後者もゐ〜〜女童只ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐるゐ真菅の莚布まへ〜。月よ對ゐ筑紫琴撫捋せる光景ハ天津小女や影向〜ゐ。龍宮の乙姫れ人間ゐ捋ぶゐ〜ゐ疑ゐ〜ゐ。ゐも蕩魂も消れゐゐゐふゐばえ〜ゐ。忽地靴然ゐ〜ゐ笑ひ。ゐゐゐも得ぬ鬱ゐ詣〜ゐハゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ。今霄の月を只ゐ〜ゐゐゐのいと惜ゐゐゐゐゐゐ。ゐゐれゐゐゐゐ人もありゐゐゐ真ゐ〜ゐひゐゐれゐ彼美女ハ含咲つ琴ゐれゐゐゐゐゐのゐれゐゐゐゐゐゐれゐゐゐゐゐゐれゐゐゐゐゐゐ。月ゐゐ祇の暗ゐれゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ


武藤太月ホ
乗じく
琴引の社ホ
詣

るく。舟人の丈五丈六といふりのハ。ふちうろう友るれハ縦翌あてさでこそ居るとも妨ハあらじ。十六夜あうるぶ。待ゝ進らてべくいふ間ハ美女ハ彼女童ハ耳ハ口をよせ〳〵。伝ふ中ゝ。私語ハ女童ハ左右をもて観音寺のうゝ走りゆきぬ。一對ひくいよ〳〵そなはりて互ハ言語もなく。武藤太ハ膝のあうりてぬひ出て立も中ぶて居も中ぶて。うりなくより添んとれども。氣高さて流臆〳〵。いひよるぶもあるぞ。美女ハ琴引よせ〳〵。前よりもなほ妙ハ奏づるを武藤太をそれハ〳〵こ流もとめぶて。ときかゝさまを引ひ。今ハ志のひるゝ。背向より。帯の間へをさ一入をやを引ゝせんとまる折〳〵も彼女童ハ一人の女使とくもふ。提偏扛擔〳〵入り来るふ序あ〳〵うりと走り退るかゝ美女ハ彼提偏を引ゝせ〳〵。只管ハ勧〳〵。武藤太も酒ハ〳〵。

いうで情を引〳〵とあんとおりひく。ふ〳〵もいろ〳〵。盃の数も中ゝ。顔をハ狙猴のごとくなりつ。ゑ〳〵笑ひ低く唄ひ称念ゑ〳〵ゑを。女ぶ〳〵ハうゑ〳〵ゑをとり〳〵。いやゝ〳〵ハ盛ふられハ。それふもあ〳〵ぬさでふ醉ふ〳〵。忽地ハの後も中ぶぞうりぬ。さう孤ハ武藤太ハ暁ちう〳〵なりゆこ流。秋風の身ハ入〳〵ふ驚き〳〵眼を開ハ琴引の神社ハあ〳〵。ゑも馴ぬ狐館ハ只ゑとり打ふれハ。こいうゑと疑ひ。ぶて身を起〳〵〳〵〳〵次の間ハ燈燭あ〳〵点〳〵。人のさゝやく声をこそ。いぶ地ハ〳〵。その孤ハ武藤太ハ甲夜のうゝを。愛とろ〳〵夢ゑもあ〳〵ぶ。洗ふ〳〵。ゑ〳〵ハ狐狢なんどゑ妖されん。ちうふハ飲ゼ一彼酒も。馬の尿ハ凝ひ〳〵。とこ流つきてハ志ぶ〳〵もたまふで。直ゑ吐ぶうおぼえつ吐も中ふて。膝を組ゑを又ゑ。忙然と〳〵居〳〵る。浩処ハ以前の

女童次の間より出来りて。今ハよく醒まひんぬ。あるじ君の待ちびあるを。
とてこるゝ人〻誘引ひて武藤太ハ半ん〻と疑怪こそ。その後方まつそ
次の間ゑ到るとゝ。彼美女うび〻〻打扮て。上世の床几ゑ尻をうけ。八九人の
女使ども。一帯ゑ居るゝ。その光景只今起程ごと〻なるを。いるゑ故
しもゑひとさまへとそ。とゝふまこと。ひぐらし〻を美女ハ叮嚀ゑ迎請じ
荒余とうち咲こ。賓ふゝゑ怪こゑひて。甲夜ゑハいゝ〻醉ゑ。
酔るゝまゝ。せんもこゝ。誘ゑ。ゝ似れハ女子ども。ゑ扛せゝ。ゑ。ゝ。ゝ。
ちゝせゑふゝ。鬻ゑハ也。酒の折ゑ〻。せる管待もせゝ。こハ。ゝ。
けさりのゑれど。家裏ゑ。ちゑ。ゝといふ間ゑ。女使二人ゝを〻。ゝ。卷絹ゝ。
りのを。駿り〻。ゝ。武藤太ハおゝる〻。跋より〻。この引出物を。ゝ。
商賣の鳥ゑ。そ。ゝ。浪速より買り〻。ゑ。ゝる物ゑ。ゝ。ゝ。明日ゑ

も同ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。恩惠の極を。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
べ。美女又女使ゑ對ひ賓のいとさ。ゝ。ゝ。酒を。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゑ。此度ハ三人ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゑを。ゝ。ゝ。辞ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
おの〻。殺を携出ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
敷の上ゑ居ゝ。武藤太ハ。ゝ。ゝ。盃をとり落ゝ。戦慄ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ある神の名を唱ゝ。助ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

白縫楓館ふ
武蔵太ど殺ま

紀平治よりゆきあひ〻〻船路よりこの讃岐ゟ漂泊し。ふく〻この処ゟ駅樓
外ゟ〻ふ新院の北衛よりゟ〻〻ゟひ又紀平治ゟ〻ば洛へのぼり〻〻潛ゟ曹
司の往方を索させゟ。四五日以前彼八町礫連忙し〻走りゟ曹司
を重病を禀〻〻石山の奥ゟ湯治ゟ日徒者武藤太といふものゟ告訴
せられ佐渡重貞ゟ搦捕られまひ〻と告ゟ付ハ朽を〻も洗はし〻て。
かゝる歎をせんよりハ君ゟ先〻ち〻死ぬ〻ゟひ。い〻〻びゟ外をべきりゟ紀平
治ゟ練られ已に死ぬ。必死をぞ〻ゟ。ゟほれ曹司のゟりゆきゟ〻果を
ちゝんゟ。ふ〻び紀平治を洛へのぼり〻〻ゟを夜毎ゟ琴引の八幡宮へ糸詣
し。夫の命恙なゟ〻んゟを禱ゟ祈しも汝も又彼神社へ詣しゟ。ゟ龍ゟ居る
をちゝ。ぶ〻〻姓名悪ゟを稱ゟ人を恨ゟ世をうちゟる氣憎さ更ゟ比
ぶゟもあゝ。ちゝゟ汝ゟゟ法樂しゟる琴の音ゟうち驚さて欄のゟ〻人
退り。〻〻ゟをゟ〻みゆげゟも淫き乞を發〻れハ酒を強ゟ醉ゟさせ潛ゟ
ゟ人扛せゟ。汝が隔なき友と扨〻りゟしをゟ〻まゟ丈五丈六と申ゟを生拘
ゟ〻責問ゟ又これ狗黨の先賊ゟ〻その子の舊悪汝ゟ〻ゟ藤市ゟの近
ゟもゟ〻首伏せ〻のこゟ〻ゟ北曹司ハ伊豆の大嶋へ配ゟれゟ〻ゟ定り。
將野伏茂光が上洛をゟち〻。彼処へ下〻ゟ〻ゟ。ちゝ〻ゟハ昼夜をゟち
ゟ走上り。中途ゟ于〻北曹司を奪ひゟ〻ゟ。かく行粧を整へ遂
ゟ丈五丈六が首を切〻ゟ汝ゟ手ゟのゟ〻ゟ今霄不意も仇ゟ達
〻。夫の存亡をゟわるゟ。誉田の神の冥助ゟ〻〻ゟ久後もゟのこゟあり。
汝既ゟ養父の主君を告訴。又その故をゟ〻養父も非命ゟ死ゟ〻ゟ。
その罪大ゟ〻〻軀ハ竹の串ゟつゟぬゟ。首を木の杪ゟ梟ゟ〻ゟ飽ゟ〻ゟ
況この附ゟ當り〻。その首を推乃ゟ御曹司ゟゟせゟゟ。いゟ故ゟ

ら人〻〻彼を縛よと仰されば武藤太さも〻慌忙それぞ〻今〻御
曹司は養父藤市が主君なるを〻〻をたぶぞ人〻まもれく告訴いたし
る。悔るもそのひま〻〻只ねがくは許まく〻いなせもあくも女使二人左右
より犇〻〻まをせあるを飁〻〻ふ〻〻迫んまれども。この女ども〻〻人撃剣
拳法ゆや達〻うん。岩ひの外勇〻〻〻〻些とも動せざまどり足とり赤裸ゐ
〻〻。忽地樣の柱へ麻索り〻〻楚と括著左右の手首をゐ前の〻〻人掩
伸〻せ〻。氷るを懐劍を拔出〻〻十の指をひ〻〻〻切落〻〻切あらせゐ
鮮血滾〻〻とながれ出〻〻。十條の赤泉漲るごと〻〻。又梅液ゐ漬〻〻生妾
ゐ似〻〻武藤太ハ只管苦痛ゐ堪ぶ〻〻魂消〻〻〻〻

第十三回

爲朝伊豆の大嶋へ配されて
白縫大ゐ千貫の旅館を開き

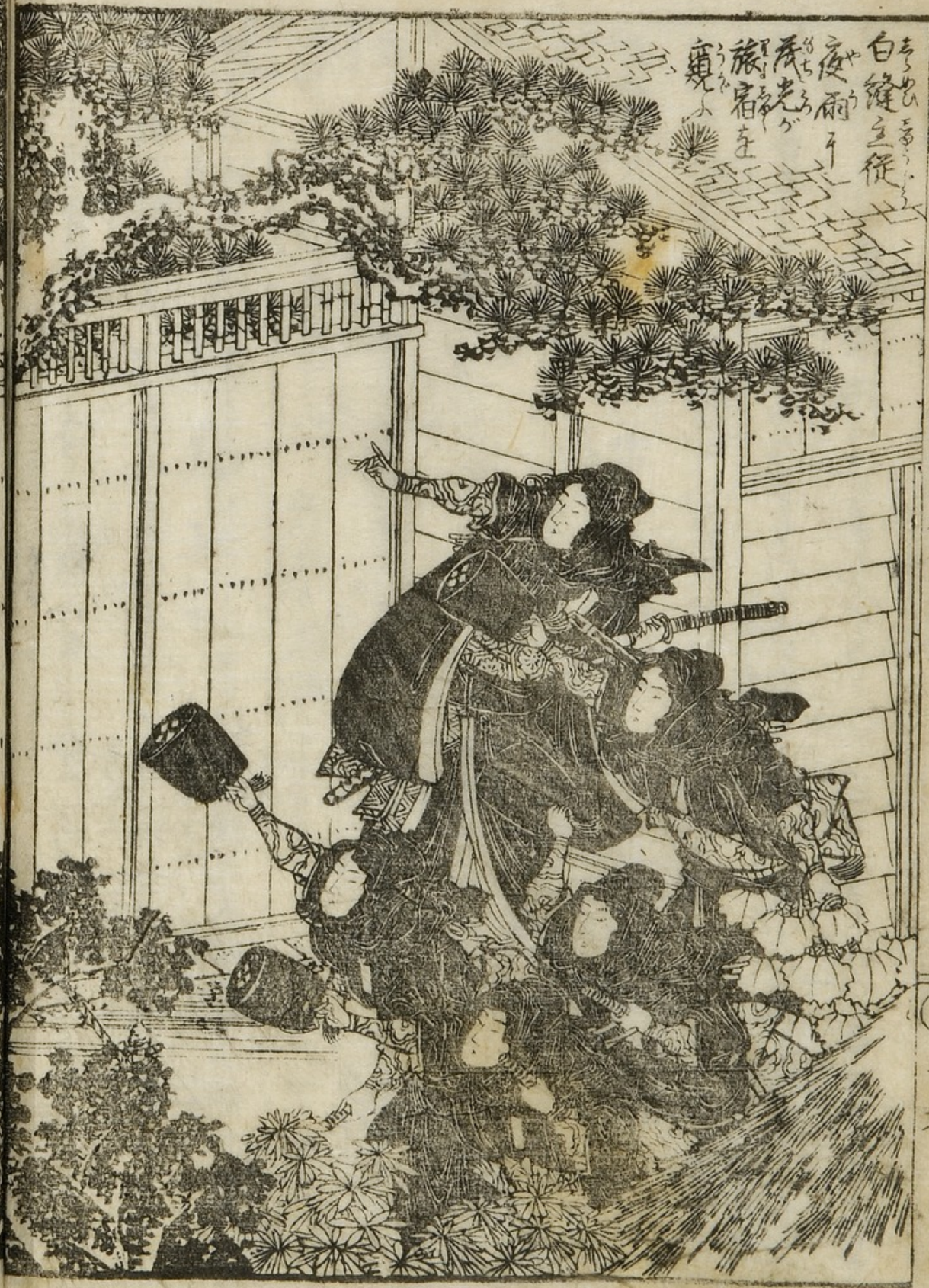
伊豆大炊特野工藤茂光ハいゐ月上旬ゐ〻ざ上洛致さるべしの仰を稟とるものもとりあへず駅の家隷を將ゐ〻ゐ月の十五日よりゐ〻ゐ源爲朝を伊豆の大嶋へ配流ゐの条路次のつゐでを用ひて召倶ゐくべきよ。周防判官季實をゐ〻ゐ仰られ茂光勅命をうけゐゐ〻。聽ゐ爲朝を受ゐ既ゐ帰國せんとゐる折〻ゐ少納言入道信西潛ゐ茂光を招き。ゐのゐゐん相語ゐゐを為るゐゐ〻なゐ爲朝ハ肘の筋を断ゐ〻ゐ綱をとゐゐ及ゐねべ窄輿を造ゐ〻ゐれゐ乗せ四方ゐ轅を〻ゐ〻ゐ轎夫九餘人ゐ舁せその郎等五十餘騎前後左右ゐ立ゐ〻ゐ茂光ハ後陣ゐゐ〻ゐ馬上勇ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐる。ゐゐゐ名ゐゐる爲朝をゐゐ〻ゐ〻。老幼彼此ゐ群集ゐ〻ゐ巷ハ押もゐ〻ゐれて。ゐれども爲朝ハ輿のゐちよ端せ〻ゐ物見より顔をゐゐよ出ゐゐねハ楚とゐ〻ゐるものもゐゐ〻遥け〻東路をゐゐよ〻ゐし翌とゐゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐゐ茂光ゐ郎等ゐゐ〻ゐ對ひゐ〻。こゐ汝ゐもよゐ〻ゐけ。人のゐゐゐ〻ハさゐゐ歎ゐ〻ゐゐと爲朝ハこよゐゐさ欲ひゐゐ〻。帝王ゐもりてゐゐれ。輿よ乗せ兵士を添。茂光ゐ供をさせゐ〻配所へ赴ゐ〻ゐる。寔ゐ汝ゐの面目ゐゐ〻ゐゐや。ゐゐゐを汝ゐゐれを罪人ゐゐゐとゐ傷ゐ〻ハ。ゐゐゐ〻ゐハゐゐ。掛畏帝の御威德ゐれハこゐを爲朝ゐゐどのゐゐのゐ。普通の凡夫ゐハ生拘られけゐよ〻ゐゐ肘の筋ハ断離ゐ〻ゐれゐ干ゐ〻損ゐ〻。弓ゐゐ少〻弱ゐゐ〻ゐれ。矢束ハゐゐ長ゐ〻弯べうゐゐ〻ハ物の徹らんハゐゐ〻ゐゐゐも勝ゐゐ。況ゐゐゐの輿ハ物ゐゐ。ゐれゐよゐて

為朝を
敬慕し
茂光
伊豆
帰る

すと少しも足を伸しもえねばさしもいかめしき打付る窓輿の今も破碎るかゝ
ふ揺ぎうごきつつ又やと声をうけ〳〵押もえの人ハ九餘人の轎夫ども肩ゆり
こゝ〳〵動き揺ぎ衆皆ひてあや〳〵只その怒りあらんるを怕き主君のご
〳〵厳こ賓のご〳〵待つゆくふ日を孤〳〵駿河と伊豆の封彊るの千貫
の郷ゑ歇りぬ。是より茂光が采地も遠うふざるふ頃〳〵も九月上旬のゆゑ
〳〵この夜風雨烈〳〵うれい守護の士卒も懈るゝあふざめれど。
故郷ちゝさふ心緩〳〵長途の疲労ゑ熟睡せり。不題白縫ハ八人九女
使そもゑ只管路を走り〳〵洛ゑ上り潛ふ北曹司のゆを問ふゑ狩野介
茂光が預り〳〵一昨の日東へとて下ゑりと伺ひれば。こハ後まある悔〳〵さゑ。
さゝふあはいそげとて夜を日ゑ継〳〵追蒐り。茂光ハ駿の士卒を領て
下ゑ路も果敢とふそ白縫ハいそぎそ紀ゑ急く祇ゑ三河路ふ〳〵追ひ

これとゝうるさき便もみ〳〵黙止せゞ。今ハいつまゝか〳〵あるべき。今暫
の風雨ゑ紛ゑ〳〵諜入べ〳〵とそよくそのの暗姉を定め夜の更〳〵をまつ
祇ゑ丑三のこゝゑ至〳〵雨も少し止ゑれば主従九人眼罩ふ面を裏こ。
ちの〳〵燈罩を点〳〵つゑ。茂光が旅館ゑ潛ゑ〳〵窺へ。おやゆれふ
先〳〵ちく。塀を踰るのあり〳〵。こハ盗賊ふとそあれ。彼を〳〵過〳〵人を
驚さゞ。こが首尾を要べ〳〵とおぼ〳〵つ白縫よくゑをす〳〵。丁と打銑
銑を刀の鞘ゑ受ゝ〳〵。やハ逃さゞゝとて女使二人走〳〵て左右より。
跌倉〳〵引下ゑ〳〵放つて踏ゝ〳〵忽撲地轉ゝるを押へ〳〵索
をかけんとそれども。ほと〳〵もあせつけとそゑ首飆く突退〳〵。ふ〳〵び
塀へまをうけ〳〵。乘らんとそれば白縫もゑ〳〵こゞ〳〵癖者が刀の端
を楚と含まるを搔拂ゝんとそゑ〳〵る面へさ〳〵ゞ火光ふ〳〵。その人を

付野外義光旅宿


白縫主従夜雨に義光が旅宿を窺ふ

熟視るに八町礫紀平治なれば互に驚きさんず縁故ゆ
問ふて白縫が嚮ふを聞くに武藤太を殺して寃を雪めん丈五
丈六が首伏せ捕て曹司伊豆の大嶋へ配流されしものを奪ひて盜
出して逃げんとせしを追ひ来り。今宵志を遂んとする顛末を竊
ふ聞えあひて紀平治が声を低くして前日ふたゝび洛へ上り
て主君の安否を探り問ふ茂光これを預りて明日伊豆へ下るべき
旨を急ぎ言ふ進ずるに及ぶ直ちに立ち出で添来る。
その隙を窺ひ盜み出して進ずべやと思ひ寄ふ彼ハ多人数なれば一人
爲損じ難ければ事を發せば今宵こそと思ひ定
つるに不意もとの処へ落合ひ主従志を齊しうして成し得べ
き前象なり。それ故に入り裡の容子を窺ひ伺ひけるに

さて塀を乗り踰ゆ門を開きしに犬皆よろこびて吠ふ
悼るに手負ひ足音高く乱れ入り戸を打砕き刀尖を揃へ驚
直に突かんとす茂光が訓ふこの時郷昔ふ驚き覚まし夜討ありと
呼ばりつゝ弓に太刀よ〻罵合慌忙く走り出るを是首の物蔭彼首の
挾間に待ちけゝ矢庭に切伏せ薙ぎ倒す主従十人芥らを勝らず繁
然たる敵の多少を見究得ず茂光が家隷ども
やがて窓を壊牆を破て七零八落に逃げ散し。
曹司ハいづ処ぞと車をもて白縫ハ紀平治とともに入り
こゝにまおくまりける客房の中央に牢輿を舁居て守る人さへあ
ざれば娘に比るんやもるに扶出して
あるべきにあらず輿の裡なるハその人ふ
あるべきに剔ぬ男なれば白縫紀平治ハさて衆その面を

さー覩さうとぐし惑ゝ動容やけり。當下紀平治ハ彼男の衣襟ゝ緬ゝ刀尖を胸のあゝりへ突つけゝ汝ハこゝ何りのぞ又ハ曹司ゝ何処ゝ置ゝ力ゝせ。とゝいへり。いわぢゝこの刀を得ゝ引すゝれゝ責問バ件の男おそるゝ。緣故を告やゝんゝまづゝを緩めゝ人ゝといふゝ紀平治ゝ彼を引起ゝゝゝを放ゝバ白縫ハ女使ゝもゝ團らゝる立ゝゝ。その傍を少時ゝ彼男ゝいふゝ。それゝハ茂光ゝ即ゝふゝ俤ゝ爲朝ゝ稱ゝ。この牢輿ゝのせゝれ洛ゝりゝるゝ下ゝりのゝその故ハゝ主茂光上洛せ一日。信西入道ゝゝふ相語ゝゝハ爲朝ハ元ゝ双の勇士なり今廢人ゝるゝといへども心緩ゝゝ加之その残黨路次ゝゝ奪ゝ立ゝゝ。足下一身の越度のゝるゝ。ゝゝ天下の大支ゝり。ゝれバ爲朝ゝゝ心利ゝる家隷ゝゝ一副ゝ。二日ゝり前ゝ洛を出ゝ。ゝもなきものを輿ゝふゝせ。如此ゝゝの風声ゝせゝ。晴ゝゝ下りゝゝ。途ゝて不慮のゝゝありゝも。者奴ゝ労ゝて功ゝゝん。この謀ゝゝ漏ゝゝ私語ゝゝ。茂光兼引ゝ。實の爲朝ゝ。二日ゝゝ起程せゝ。ゝゝゝゝ今ゝゝ伊豆の府ゝゝゝ。又大嶋ゝゝ渡りゝゝん。ゝれゝゝゝゝゝ白縫ゝゝを少ゝ忽地望をゝゝゝ。朽ゝゝ謀ゝゝゝとして却ゝ誰ゝゝ海山多ゝ隔ゝる四國の果ゝりいそゝゝゝゝゝ

茂光
兵衛
伏く
白縫を
描んとす

ゐ。尋常みゝ在をれと或ハ励し或ハ諫め女使ホの法もあ
その死を止やしぶるゐゝも憎べきハ信西が奸智茂光う便僻し此奴も茂光
が郎ホゐゝハ生ゐくべきふあゝぶ既ハ首を剣んとをるを白縫とゞめ
ゝけの寔ふ憎べしといくも。假ゐも曹司の名を冒て洛よりくだりしを
殺さんとすゝ流ハ快とせど只この機密を漏さぬやうハ計ひて追放ゝ
よゝ仰まれい紀平治とゝをもゝ彼男が鼻を劓唇を断害生涯物を
いゝせゝて衝放をふ鼻より流れ出る血ハ彼温公が打破りし瓶の水ふ
異ゐふねどゐ命や惜りん両の袖りゝ面を掩ひ苦痛をものびく
辺去りう白縫ハゐゐる齟齬ゝ。耳ゝ勢ふハ似げゐゝ尾越の息の對
をうゝゐひゝゐゐげハをゝをゐゝふいひ慰め衆皆ふゝゝび罩
燈を点ゝつを門のやうりまゝ退出ゝ。白縫ハゐ遺憾やありん彼首

熟ゝゝを見ハ新ハ埒を締まハゝ。伊豆大仗狩野茂光と写せゝ榜を大
竹のゝゝハ打つけゝいうやゝゝ建ゝれハ是とゝ今胥ハう鳥の當の敵ゐれ
といひもあゝを。太刀引抜つ走りうゝり竹の中央丁と切る切ゝれゝ落り
榜ゝゝもハ忽然ゝゝゝ喊の声貝鉦の音高くゆゝ茂光が伏兵一度ホ
起りゝくゆくべき路を遮ゝゐ。大將茂光真先ハ馬を進ませ汝ホ兒鼠
の輩既ハうう弥ふ入りゝゝいづ地へうゆんとをるとゝゝ縛を受よゝゝ呼
りゝる白縫も紀平治もこの光景をゝゝ歯を切り嚙うゐ茂光汝信西ふ
阿諛ゝゝか奸計を行ひゐゝふ僅ゐる女ゝゝふ忍怖ゝこの蔑ゝゐゝせ
されいむゝく立ゆゝんとをひつゝゐふこゝゝへ出ゐハ死神や誘引
ゝん其処退ゝゝとといきゝゝ主從十人面もゝゝ火出るゝくハ挑ゝ
戰ゝ茂光ハ勢ありといくも。死を究ゝる忠臣烈女の尖ハ刃ハ切ゝれ

いひびみくも迎そをる白縫ハ迎さどとて追蒐まふを紀平治はそぐわ
く諫くいふゆう。茂光勅を禀く御曹司を預下ゆを中途ゆて切害
せばそのの崇誰ぐうくはあくぐさ。兄御曹司ぶ害ーまるおみ。且亦彼ぐ
迎走くふくれを誘引謀とおばゆゆるり。切ちくせーを面目ふーしーこ落
まくうーと諫ゆどハ白縫げくそうけ引く。女使ゆ落ゆもまを従路をこちぐ人。
加奴木山のくくく走去くくくれ。

椿説弓張月前篇巻之五 甲

拾遺和歌集